

特別座談会(抄録)

JDA 2009 特別座談会「資生堂名誉会長 福原義春氏と語るデザインの未来  
—一個のアイデンティティの模索こそ必要—

日時：平成21年4月21日

開催場所：東京六本木 アクシス・ギャラリー

主催：NPO日本デザイン協会



JDA 2009 特別座談会風景  
六本木 アクシス・ギャラリー

福原義春氏 資生堂名誉会長

進行：大倉富美雄 NPO日本デザイン協会理事長

司会：秋山修治 NPO日本デザイン協会事務局長

主要発言者：中西元男氏（株）PAOS代表、日本デザイン共同体理事長  
浅香 嵩氏（社）日本インダストリアルデザイナー協会理事長  
上條喬久氏（社）日本グラフィックデザイナー協会副会長  
宮沢 功氏 NPO日本デザイン協会副理事長  
山内 勉氏（社）日本インダストリアルデザイナー協会前理事長  
勝井三雄氏（社）日本グラフィックデザイナー協会会長  
加藤芳夫氏（社）日本パッケージデザイン協会副理事長  
関根紀明氏 関根桐材店社長 （以上発言順）

大不況の中でこそ足もとの文化、経済、社会を見直す時。未来のデザイン価値を問う本質的な議論を願い、福原氏の著書「ぼくの複線人生」の紹介から始め、お話を伺った。福原氏は、最近、デザインという言葉はいろいろに用いられるが、意匠として用いられると同じように、デザインとはアイデンティティの模索であり、それは自分とは何者か、自分を表現したら何が出来るかということだ、と話を進められた。

さらにイタリアの社会学者のお話として、「皆、イタリアが好きで多くの国から沢山の方がイタリアを訪れるが、イタリアの文化は観光のためにつくられたものではない。イタリア人は極端な個人主義者で、まず自分を愛することから始まり、おいしい食事、そして、きれいな家とインテリアを求める事になる」という話を紹介。われわれはローマの建築物などを見て感動するが、2000年前のローマの皇帝は、2000年後の観光客を誘致するために造ったわけではない。日本は、明治にはヨーロッパをまね、戦後はアメリカを規範とした結果、経済力の拡大と引き換えに、文化や感性を年と共に失ってきた。現象的に振り回されて尊敬を得られず、憧れを持たれない国になったと思う。日本人とは何かについて、もう一度、明治の文明開化以前のころに戻って考えなければ、とされた。

そこにあるのは、同質性ばかりではなく琳派も東照宮も一茶もある「デュアルスタンダード」で、そこからアメリカや、世界向けそれぞれのグローバルスタンダードのシステムと、日本は日本の文化、言葉、形で表現するシステムがあるべき。その「デュアルスタンダード」を使い分けてきたのが日本人だったのではないのか、と述べられた。

この後、参加者からの発言が続いた。まず中西氏が、日本人は物事をストックで見ないで、フローの価値ばかりで見過ぎるようだと述べ、浅香氏は、日本人の公共という概念は未成熟で、そこでバーチャルな世界に育つ若者にもっとリアルな経験も与える役割などを紹介した。日本の教育では個の問題がなおざりにされたと私も述べたが、上條氏は地域とか、小さいモデルから考える方が、アイデンティティの問題がハッキリ見えてくるのでは？とした。アイデンティティは経済価値のみではない、それをどう理解し、どう我々の道具で表現出来るのかが悩みだと宮沢氏が続けた。一方現実問題として、山内氏は市民の文化レベルでデザイン意識を高めるデザインミュージアム開設などは、これからどうしたものかと問い、勝井氏は「カワイイ」という言葉を例にし、イメージの安易な氾濫を心配して、「虚」「粹」「ハレとケ（褻）」のように、日本の土壌を意識した創作の必要を述べた。桐商品を扱う関根氏は、工業製品も、昔からあるような自然と共生するデザインも受け入れられたら、と語り、またちょうど、資生堂とサントリーの商品の歴史を示す展覧会があり、その展覧会に関わった加藤氏は、そこに両社の商品の文化を見たと報告した。

最後に福原氏は、こういう問題は簡単に答えが見つからないし、ここで決めるわけにはいかない。すべてプロセスであり、それぞれの立場は異なると思うが、この先、5年、10年と発表したり運動したりし続けてゆくことで、一つの方向が出来上がってゆこう。そういうプロセスに意味があろう。と締めくくられた。

（文責/大倉富美雄）

なお、当日の詳細記録については本部事務局へお問い合わせください